

## 区主催組織キャンプ参加者にみる地域青少年育成者への認識変化について

○廣田 治久(余暇問題研究所) 橋本 和秀( )

キーワード： 青少年育成、育成者、組織キャンプ

### 1. はじめに

中央教育審議会は自然環境の中での体験学習を、全国子どもプランでは地域社会においても教育環境の整備・充実を提唱するなど、青少年の健全育成を目的とした様々な取組みが行なわれている。そのような中、都内K区では、地域の青少年育成を推進する育成者らが多数参画したキャンプが行なわれている。対象としたキャンプの特徴として、育成者と教育委員会、そして野外教育専門家の3者からなる実行員委員会によって計画・準備し、「指導部」「管理部」を組織する。育成者とは、地域の青少年育成を含めた様々な活動に関わっている地域住民団体の人達のことであり、地域内においての行事、青少年教育、子供会活動などに参加・協力している。対象となったキャンプにおいても、管理部として期間中は延べ23名が参加し、キャンプ本部の設営・撤収、食事管理、プログラムのサポート等を担当している。しかしキャンパーの指導は「指導部」が担当し、管理部スタッフは、プログラムの直接的な運営・指導は行なわず、いわゆる裏方としての作業に徹することを前提としている。キャンパーは、直接的に育成者と活動と一緒に行うことはないものの、食事の給仕、飲料水の支給など管理部の献身的な活動を間近に見る環境にある。

同区のキャンプや地域活動に対し廣田、栗原が行なった「地域活動と少年・少女キャンプについての実践報告」(’99)において、「循環作用」として地域活動とキャンプの関係に注目した。また専門家として同区内の地域活動や地域主体キャンプに参画する時、それぞれを単体として捉えるのではなく、継続性、関連性を考える必要性が感じられた。そこで、まずそれらの基礎的資料を得る上で、キャンプに参加する育成者に着目した。キャンプにおいてリーダーの存在が重要であるように、地域活動において育成者の存在は重要と考え、キャンプに参加したキャンパーの育成者への認識を探ることは意義のあることと考える。

### 2. 目的

本研究では、区主催キャンプに参加したキャンパーの育成者への認識が適応、不適応、認知において、キャンプ参加前後にいかに変化するかを明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究方法

- 1) 被検者 … 被検者は、K区の主催する自然生活体験事業に参加した小学6年から中学3年までの合計73名を対象とした。対象としたキャンプは2001年7月21日～26日の日程で行なわれた。被検者の中には同区内においてジュニアリーダーとして活動、またはジュニアリーダー養成講座を受講している男女36名が含まれる。
- 2) 調査方法 … 調査は7月20日の事前研修と25日キャンプ終了直前の2回、集合調査を用いた。質問項目は、赤井ら(’78)が行なったカウンセラーに対する人間関係評定尺度を参考に「適応」4項目、「不適応」4項目に「育成者の認知」を加えた9項目を設定した。項目に対し「はい」10点、「わからない」0点、「いいえ」-10点として得点化した。
- 3) 分析方法 … 調査項目9項目に対し得点の平均、標準偏差、平均値の差の検定を行った。被検者の特徴としてその約半数がジュニアリーダー活動に関わることから、事前に育成者との何等かの関わりがあることが予想される。そこで被検者を「一般群」(以後I群)と「ジュニアリーダー群」(以後J群)にわけて両群の比較分析を行った。

#### 4. 結果

表1 得点変化と検定結果

	質 問 項 目	キャンプ前		キャンプ後		t
		平均値	S D	平均値	S D	
認知	育成者のことを知っていますか	-0.23	6.14	5.37	5.55	5.77**
適応	育成者がいることでキャンプが楽しいですか	5.00	4.69	7.74	3.86	3.77**
	育成者を偉い人だと思えますか	2.29	6.35	3.86	6.72	1.40
	育成者の言うことを何でもききますか	-0.64	5.81	1.58	5.98	2.18*
	育成者に自分のことを話すことが出来ますか	1.17	6.43	1.79	5.99	0.57
不適応	育成者のそばにいきたくないと思えますか	-4.25	6.03	-7.61	4.18	3.84**
	育成者に自分の思っていることを言いませんか	0.76	5.97	0.37	6.54	0.37
	育成者がもっといい人だと思えますか	-1.62	5.40	-3.44	7.20	1.65
	育成者を恐い人だと思えますか	-4.01	6.61	-7.80	4.77	3.83**

N : 73 \*p<.05 \*\*p<.01

育成者の認知は、キャンプ前後で平均値がマイナス値から大きくプラス値に変化しており、平均値の差にも有意差が認められた。育成者に対する適応については、全ての質問項目においてプラス方向に転じている。差の検定では「育成者がいることでキャンプが楽しい」「育成者の言うことを何でもきく」の2項目で有意差が認められた。逆の不適応では、マイナス方向に4項目全てが変化している。「育成者のそばに行きたくないと思えますか」「育成者を恐い人だと思えますか」に、キャンプ前後に有意な差が認められた。

比較分析では、キャンプ前では不適応の「育成者を恐い人だと思えますか」においてI群：-6.24、J群：-1.86とI群のマイナス値が高く、有意差が認められた(2.93\*\*p<.01)。キャンプ後では適応の「育成者に自分のことを話すことが出来ますか」において、J群：0.29よりもI群：3.38が大きく、有意差が認められた(2.18\*p<.05)。

#### 5. 考察、まとめ

育成者への認識は、育成者の認知において最も大きな変化が認められた。また育成者に対する適応については肯定する変化が、不適応については否定する意識の変化がみられた。このキャンプの性質上育成者が直接的に関わる事の少ない状況の中でもその認識を大きくしていることが明らかとなった。これらはキャンプにおける対人態度の変容('80,橘ら)、人間関係('81,清水ら)など、キャンプ参加による対人関係への影響が育成者にも同様に起りえたものと考えられる。また「I群」と「J群」を比較すると、キャンプ前では不適応「育成者を恐い人だと思える」において、「I群」の方が否定的意識の高いことが明らかとなった。キャンプ後では適応「自分のことを話すことが出来る」に対し「I群」がより肯定する意識の変化の大きいことが認められた。この2項目の差はジュニアリーダー活動、およびその受講している「J群」の方が事前により育成者と関わる機会多く、その中で出来あがった関係性が影響しているものと推察される。しかし、全体としてはキャンプ参加によって育成者を「良き大人」とする認識が高まったと考える。キャンプ経験が青少年の健全育成に有効であることは周知のことであろう。地域主催のキャンプにおいても同様の影響が期待されるが、その後の地域での青少年育成を考えた時、これらより良い方向で認識が変化したと思われる育成者の存在が重要となるものと考えられる。

今後の課題として、調査項目の検討や育成者に対する人物評価をイメージなど他の側面からも研究する必要性が感じられた。また、2群に分けた時に見られた認識の異なりなどからも、被検者の地域活動参加意識や状況などに注目し研究を進めたい。